

# よむよむNEO No.14

R2.5.1(金)

## 本の世界は宝さがし

「まなの本棚」

芦田愛菜・著

(小学館) NDC.019



3歳から芸能活動を始め、人気俳優の道をひた走ってきた芦田愛菜さん。学校に仕事に、多忙な日々をおくる一方、彼女は本を読まずには一日もすごせないほどの無類の読書好きとしても有名です。

これは、そんな愛菜さんがみんなに贈る、読書愛あふれるブックガイドです。

読んでみてもまずびっくりするのは彼女の読書量の多さ。年間100冊以上読んでいるというのですから驚きです。そして小学生時代からかなりレベルの高い本も読みこなしています。というよりも、ちょっとむずかしいかな？よくわからないな、と思っても興味があったらとにかく手にとって読んでみる。そしてもっと成長してからもう一度読み返してみる。「あ、こんなお話だったのか。こういう意味があったのか」そんな風に時間をかけて重ね読みをしているそうです。「わからなくてもいい」と思って読んでいるから、どんな本を手にとるのも抵抗がないのでしょうね。(本のラインナップが私の趣味と大幅にかぶっていたのもうれしかったなあ)。

「僕のメジャースプーン」「白狐魔記」「永遠の0」  
「天と地の方程式」「反撃」「きよこ」...

「なんでそんなに本が好きなの？」と聞かれて、愛菜さんは一番に「自分の想像で物語の世界を作り上げていく楽しさ」

だと答えています。

「だれかに与えられたものじゃなく、色も形もすべて自分でプロデュースできるって、すごく楽しくないですか？」

愛菜さんにとって、絵や映像がない=自由度が高いということなのです。

そして2つめには「自分とはちがう誰かの人生や心の中を知ること」に興味があるから、と言っています。

「類似体験」としての読書です。

自分ではない誰かを演じるお芝居の仕事と、読書とはとても近いのだそうです。なるほど！

愛菜さんの読書に対する考え方は、私がこれまで橋っ子に言ってきたこと、言いたかったことを、1から10まで代弁してくれているようで、うれしかった。そうそう、そうなんだよ〜と、深くうなずきながら読みました。読書体験のつみかさねが、愛菜さん自身の人となりや教養や利発さや、そういった目に見えない美しいものになって、まどわれているのだと感じました。まさに「読書は目に見えないアクセサリ」なのです。

同世代のみなさんの読書欲を、おおいに刺激することまちがいの1冊。愛菜さんの本棚をのぞいて気になる本が見つかったら、そのときにはぜひ学校図書館にサポートさせてくださいね！

